

# 携帯電話コミュニケーションから見た 大学生の対人関係<sup>1)</sup>

足立 由美・高田 茂樹  
雄山 真弓・松本 和雄

## I. はじめに

近年、コミュニケーションメディアの多様化やその普及・影響について論じられているが、携帯電話の急速な変化・普及とそのことが与える影響については研究・議論が追いついていない感さえある。1999年2月にインターネット対応型携帯電話が登場して以来、携帯電話の若年層への浸透にいっそう加速がついた（ソフトバンク, 1999, 2000）。特に、大学においてはどこへ行っても携帯電話で話をしている学生ばかりである。最近では加入電話に入らず、連絡手段として携帯電話だけをもっている下宿生が増加傾向にある（田中, 2001）。平成13年度の総務省の調査によると、20～29歳が最も携帯電話保有率の高い世帯になっており、90.5%に達している。また職業別集計では、「学生」の携帯電話利用率（79.2%）が突出して高いことが報告されている。

携帯電話＝電話との概念からなされてきた音声通話に関する調査研究は、携帯電話がパーソナルメディア化、マルチメディア化したことで新たな展開を見せている（岡田・松田, 2002）。携帯電話は1979年に自動車電話として使用が開始されるが、しばらくの間普及しなかった。しかしその後急速に小型化・低価格化が進み、1994年には携帯電話の売り切り制の導入、1995年にはPHSサービス開始、1996年には文字メッセージができるようになった（三宅, 2001）。携帯電話が若年層に普及した理由は、このメール機能が携帯電話に搭載されてからと言われており（藤竹他, 2001）、音声通話より携帯メールがよく利用されているという傾向はヨーロッパ、アジアなど世界中で報告されている（TBS ブリタニカ, 2001, 2002）。

携帯メールに関する調査研究は始まったばかりであるが、若年層に限定した場合、(1) 携帯メールの利用者において音声通話より携帯メールの利用頻度の方が高く、(2) 携帯メールとパソコンによるインターネットの並行

的利用者においてパソコンEメールより携帯メールの発信頻度の方が高いことが報告されている（橋元, 2001）。また、携帯メールは男性よりも女性に利用頻度が高いことが報告されている（松田, 2001；見城, 2001；橋元, 2001）。若者が携帯メールを好む理由として携帯メールのもつ距離感や密室性が指摘され、現代の日本の若者特有の気遣い性向や精神的な自己防衛機制（三宅, 2001）、対面緊張の高さ（都築・木村, 2000）、いつも誰かとつながっていたいと思いながら選択的な対人関係（高田他, 2000；足立・松本, 2001；松田, 2002；三宅, 2002）について考察されている。他方、携帯メールのヘビーユーザーの社交性の高さも報告されている（松田, 2001）。

われわれは携帯電話を調査やEメールカウンセリングの媒体に利用することを目的に2000年6～8月、2002年1月に携帯電話に関する調査を行ってきた。本稿では、2回の調査によって携帯電話コミュニケーションの実態から見てきた大学生の対人関係について考察することを目的とする。特に携帯メール利用についての実態を報告するとともに、性別分析の結果も報告する。

## II. 方 法

### 1. 調査の概要

調査は関西学院大学の学生に対して、質問紙調査を行った。1回目の調査（以下調査1）では携帯電話の所有率や利用実態について、2回目の調査（以下調査2）では調査1の結果に基づき、携帯メールの利用実態についてより詳細に尋ねた。

### 2. 調査1

#### 2.1 調査方法

調査時期は2000年6月中旬から8月末までである。調査員5名が大学内、または大学周辺で個別に調査を実施した。収集したデータ数は197名分であり、有効回答数は195名（男性94名、女性101名）となった。被験者の平均年齢は20.7歳（男性20.8歳、女性20.7歳）であり、一部大学院生を含む。

<sup>1)</sup> 本研究は平成12～13年度電気通信普及財団助成研究として行ったものの一部である。

## 2.2 質問内容

主な質問内容は①携帯電話等の所有および使用の実態、②Eメールに関する質問、③依存対象に関する質問に分類される。

携帯電話等の実態については、携帯電話所有の有無、使用状況、所有の理由、通話相手、携帯メール相手、1ヶ月の使用料金、パソコン所有の有無、携帯電話およびパソコンでの情報検索の状況、携帯電話およびパソコンの今後の所有希望などについて尋ねた。

Eメールに関する質問は、Eメールだけのつきあいや、Eメールでの相談状況（相談希望、Eメール相談の媒体、）Eメール相談に必要なこと、Eメール相談の長所・短所などについて尋ねた。この質問はパソコンによるEメール、携帯メールの両方の利用を含んでいる。なお、「カウンセリング」という用語から受ける印象は治療的意味合いを強く喚起させるため、質問紙では「Eメール相談」という用語に統一している。

依存対象に関する質問は、依存対象を明らかにするもので加藤（1977, 1987）や今林・島田（1989）の質問項目を参考に作成した。本研究では大学生の依存対象と携帯電話コミュニケーションとの関係を検討するため、対象は「父または母」「同性の友人」「異性の友人」「恋人」「きょうだい」「先生」「自分」の7対象とし、「ふだんいっしょにいたるとき心が落ち着く対象」「大変困った問題にぶつかったときに相談する対象」「大変困った問題にぶつかったときに意見を重んじる対象」「これからの人生で自分の心の支えになってくれる対象」「ふだん一般に気にかけている対象」の5つの観点について、それぞれ上位3位まで順位付けを求めた。

## 3. 調査2

### 3.1 調査方法

調査時期は2002年1月中旬から1月末までである。調査員2名が学部の講義に出席していた学生を対象に集団または個別に調査を実施した。収集したデータ数は305名分であり、有効回答数は302名（男性161名、女性141名）となった。被験者の平均年齢は20.2歳（男性20.5歳、女性19.8歳）であった。

### 3.2 質問内容

主な質問内容は①携帯電話等の所有および使用の実態、②携帯メール送信に関する質問、③Eメールに関する質問に分類される。

携帯電話等の所有および使用の実態については、所有している携帯電話の種類、所有期間、機種変更の回数、使用状況、所有の理由、1ヶ月の使用料金、今後の所有希望などについて尋ねた。先行研究によって大学生における携帯電話の普及率は9割を超えていることが報告されており（都築・木村, 2000; 田中, 2001）、われわれ

の調査においても調査1の時点で92.3%の所有率が確認されたため、調査2では被験者が携帯電話を所有していることを前提として質問し、所有していなかった被験者のデータは無効としたが、少数であった。

携帯メール送信に関する質問については、被験者の所有している携帯電話に入力できる文字数、携帯メール1件に入力する文字数および絵文字の数、最長携帯メールの入力行数、携帯電話の操作性に関する主観的評価などについて尋ねた。「携帯電話等のEメール送信履歴を見て、以下の質問に答えてください。」という指示にしたがって、携帯メールに関する実態を記入させた。

Eメールに関する質問は、調査1と共通の質問項目である。

## Ⅲ. 結 果

2回の調査において得られた回答のうち、大学生の対人関係に関連のある結果について報告する。まず、調査対象者の内訳をTable 1, 2に示す。

### 1. 調査1の結果

#### 1.1 携帯電話等の所有および使用の実態

携帯電話所有者（全体の92.3%）に対して、携帯電話をどのように使用しているかを「主に発信用通信手段」「主に受信用通信手段」「発信・受信ともに使う通信手段」「主にEメール送受信機」「主に情報検索機」「遊び道具・アクセサリ」の中からひとつ選ぶよう求めた結果、65.7%の人は「発信・受信ともに使う通信手段」と回答した。次に多かったのは「主にEメール送受信機」で17.1%であり、「主に情報検索機」を選んだ人は1名、「遊び道具・アクセサリ」を選んだ人は一人もいなかった。1日の携帯電話での平均通話時間は23.3分であり、最小値は0分（23名）、最大値は300分（1名）であった。最大値は1名だけ突出しており、次に多いのは120分であった。1日の携帯メール回数は平均6.4回であり、最小値は0回（34名）、最大値は60回（1名）であった。

携帯電話でのコミュニケーションの相手について「同性の友人」「異性の友人」「恋人」「親」「きょうだい」

Table 1 調査1対象者の内訳

	人数	%	平均年齢	標準偏差
男 性	94	48.2	20.8	2.6
女 性	101	51.8	20.7	2.0
合 計	195	100.0	20.7	2.3

Table 2 調査2対象者の内訳

	人数	%	平均年齢	標準偏差
男 性	161	53.3	20.5	1.7
女 性	141	46.7	19.8	1.2
合 計	302	100.0	20.2	1.5

「先生」「その他」から選択し、上位3位まで順位付けを求めた。携帯電話の通話相手1位で最も多く挙げられたのは「同性の友人」51.4%であり、次に「恋人」31.4%、「異性の友人」8.6%の順になった (Fig. 1)。携帯メール相手1位で最も多く挙げられたのは「同性の友人」49.0%であり、以下は「恋人」25.5%、「異性の友人」16.6%のように通話相手と同じ順になった (Fig. 2)。

現在携帯電話とパソコンを両方使用している人に対して (全体の89.7%)、どちらをよく使っているか「パソコン」「携帯電話」「どちらも同じくらい」の3択で回答してもらった結果、66.3%の人が「携帯電話」と回答した。「パソコンと携帯電話は、どちらがあなたにとって身近なものですか」との質問には、78.3%の人が「携帯電話」と回答した。携帯電話とパソコンとの比較の結果、携帯電話の方が所有率、使用頻度ともに高く、携帯電話への親近感の高さが示された。

## 1.2 Eメールに関する質問

不特定相手とのやりとりについて、「直接会ったことがなく、Eメールやニュースグループのみを通して相互にやりとりしている相手がありますか」という質問をした結果、「やりとりしている」20.1%、「一度もやりとりしたことはないが、してみたい」25.8%、「一度もやりとりしたことがないし、したいと思わない」41.2%、「過去にやりとりしていたがやめた」12.9%であった。「Eメールで悩み事を相談したりしますか」という質問に3件法で回答を求めた結果、「よく相談する」11.9%、

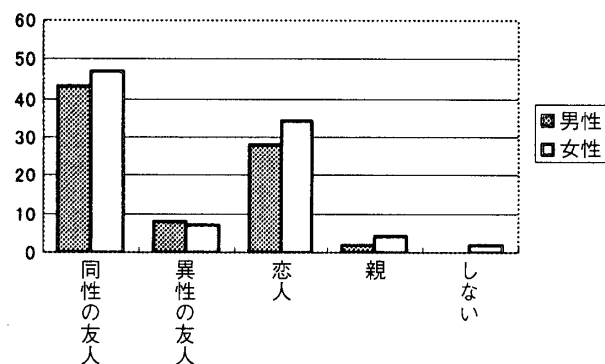


Fig. 1 携帯電話の通話相手1位 (2000)

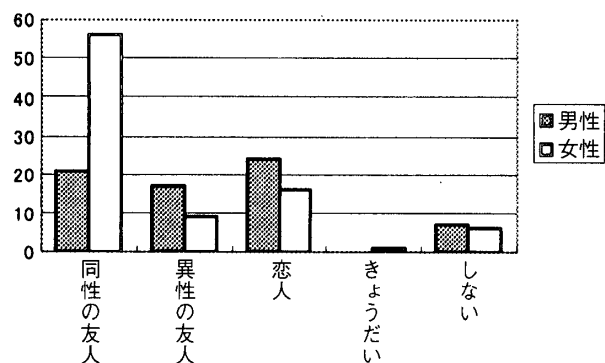


Fig. 2 携帯メール相手1位 (2000)

「時々相談する」38.3%、「Eメールでは相談しない」49.7%となった。「機会があればEメールで相談にのってもらったり、カウンセリングをしてもらいたいですか」という質問には「はい」が41.0%、「いいえ」が59.0%であった。

Eメール相談に使う媒体について、パソコンと携帯電話の両方がある場合にどちらを使うかを「パソコンでも携帯電話でもどちらでもかまわない (状況により使い分ける)」「パソコンがあれば携帯電話は使わないと思う」「携帯電話があればパソコンは使わないと思う」「どちらでもEメール相談をしないと思う」の4つからの選択を求めた結果、パソコンがあっても携帯電話を使うという人は少なかったが (5.7%)、「どちらでもかまわない」という回答が最も多く、47.4%であった。

情報伝達手段としてのEメールの長所・短所について自由記述で記入してもらった結果、その回答からは直接言いにくいことを伝えたり、相手の都合を考えずに自分のペースで連絡できることにメリットを感じる反面、文字だけでは細かいニュアンスが伝わらないために誤解されているのではという不安が生じ、すぐに返信されるかどうかを非常に気にする傾向が見られた。一方的に伝えたいことを伝えているように見えて、実は相手からの反応を期待しているようである。対面のコミュニケーションにおいて緊張の強い人には、「しゃべらなくていい」「伝えにくいことが言える」「考えを整理できる」などEメールが有用なコミュニケーション手段となることが示唆された。

## 1.3 依存対象に関する質問

依存対象を尋ねる5項目について、「父または母」「同性の友人」「異性の友人」「恋人」「きょうだい」「先生」「自分」から選択し、上位3位まで順位付けを求めた。「ふだんいっしょにいるとき心が落ち着く対象」の1位で最も多く挙げられたのは「同性の友人」31.7%であり、「恋人」29.6%、「父または母」9.5%の順になった (Fig. 3)。「大変困った問題にぶつかったときに相談する対象」の1位で最も多く挙げられたのは「同性の友人」38.9%であり、「恋人」14.7%、「父または母」10.0%の順になった (Fig. 4)。「大変困った問題にぶつかったときに意見を重んじる対象」の1位で最も多く挙げられたのは「同性の友人」28.1%であり、「父または母」24.5%、「恋人」5.7%の順になった (Fig. 5)。「これからの人生で自分の心の支えになってくれる対象」の1位で最も多く挙げられたのは「恋人」34.0%であり、「同性の友人」と「父または母」が21.5%、「自分」が19.4%の順になった (Fig. 6)。「ふだん一般に気にかけている対象」の1位で最も多く挙げられたのは「恋人」31.9%であり、「同性の友人」24.1%、と「父または母」13.6%の順になった (Fig. 7)。

依存対象を尋ねる5項目を1位を3点、記入なしを0点として得点化し、対象ごとに加算して依存度得点を算出した。また、携帯電話の通話相手1位を3点、記入なしを0点として対象ごとに携帯通話相手得点を算出し、携帯メール相手についても同様に携帯メール相手得点を算出した。実際の依存対象と携帯通話相手との間の関連を Kendall の順位相関係数で分析した結果、「父または母」と「親」( $r=.299, p<.001$ ), 「同性の友人」間 ( $r=.265, p<.001$ ), 「異性の友人」間 ( $r=.430, p<.001$ ), 「恋人」間 ( $r=.608, p<.001$ ), 「きょうだい」間 ( $r=.333, p<.001$ ) にいずれも正の相関が見られた。実際の依存対象と携帯メール相手との間の関連を Kendall の順位相関係数で分析した結果、「同性の友人」間 ( $r=.261, p<.01$ ), 「異性の友人」間 ( $r=.330, p<.001$ ), 「恋人」間 ( $r=.575, p<.001$ ), 「きょうだい」

間 ( $r=.284, p<.01$ ) にいずれも正の相関が見られた。「父または母」への依存意識と「親」への携帯メールの頻度の間には相関は見られなかった。「恋人」とは音声通話でも携帯メールでも頻繁にコミュニケーションをとり、依存度も高いことが示された。

## 2. 調査2の結果

### 2.1 携帯電話等の所有および使用の実態

携帯電話をどのように使用しているかを「主に電話機」「主にEメール送受信機」「電話、Eメールとも同じくらいよく利用している」「主に情報検索機」「遊び道具(ゲーム機)・アクセサリ」「その他」の中からひとつ選ぶよう求めたところ、45.7%の人が「電話、Eメールとも同じくらいよく利用している」と回答した。次に多かったのは「主にEメール送受信機」で40.3%であり、2000年度調査時の17.1%から大きな伸びが見られた(Fig. 8, 9)。これは携帯メール使用目的の携帯電話所有者が増加したことを示唆する結果であった。「主に情報検索機」「遊び道具・アクセサリ」を選んだ人は1人もいなかった。携帯メールを送受信する件数については、1日平均受信数は10.1件であり、最小値0件(1.6%)、最大値60件(0.3%)、最頻値10件(22.9%)であった。1日平均送信数は9.3件であり、最小値0件(1.6%)、最大値60件(0.3%)、最頻値10件(23.8%)であった。

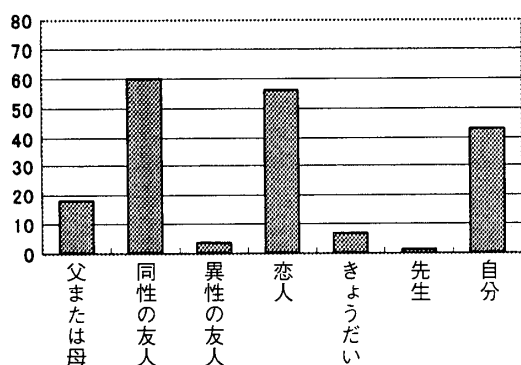


Fig. 3 落ち着く相手1位 (2000)

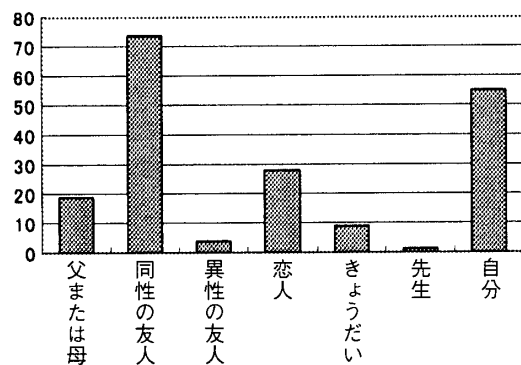


Fig. 4 相談相手1位 (2000)

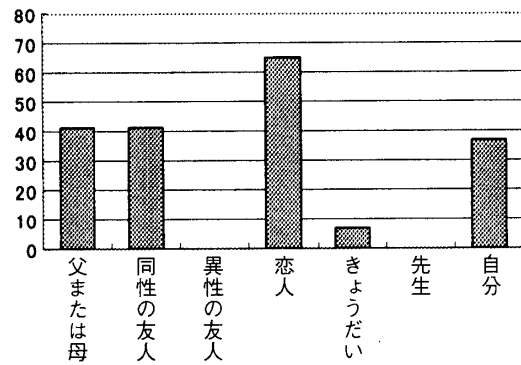


Fig. 6 心の支え1位 (2000)

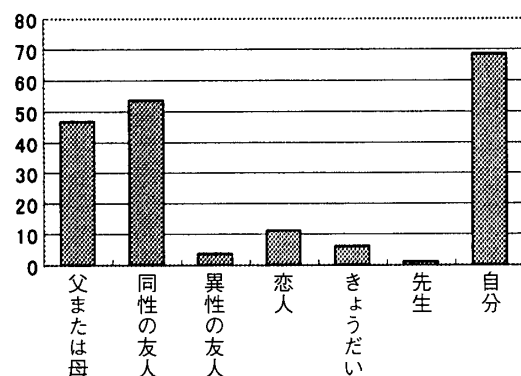


Fig. 5 意見重視相手1位 (2000)

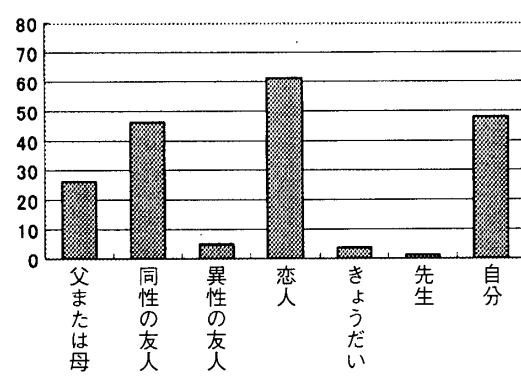


Fig. 7 気にかけている相手1位 (2000)

## 2.2 携帯メール送信に関する質問

一般にどのくらいの長さの携帯メールを送信しているかを被験者所有の携帯電話の画面での表示文字数と1件あたりの平均入力行数で計算した結果、62文字となり、最小値10文字(0.4%)、最大値300文字(0.4%)、最頻値50文字(16.9%)であった。最近送信した最長メールについては193文字となり、最小値20文字(0.7%)、最大値900文字(0.7%)、最頻値200文字(11.7%)であった。絵文字は1件あたり平均2.5個使用するという結果になったが、最頻値は0個(22.4%)であった。10個(3.0%)、15個(1.0%)、20個(0.3%)使用するという回答も見られ、使用する人は多用するが使用しない人は使用しないという使用の実態が示唆された。

また、被験者所有の携帯電話での文字入力について以下の4つの質問を3件法で尋ねた(有効回答数229名分)。まず、携帯電話での文字入力については、「楽しい」が24.0%、「苦にならない」が42.8%、「面倒」が33.2%となった。操作スピードに関する主観的評価は「速い」が23.1%、「普通」が59.4%、「遅い」が17.5%となった。文字変換の使いやすさについては「使いやすい」が15.7%、「普通」が44.5%、「使いにくい」が39.7%となった。変換ミスに関する主観的評価は「多い」が24.1%、「時々ある」が59.6%、「ほとんどない」が16.2%となった。

## 2.3 Eメール相談に関する質問

不特定相手とのやりとりについては、調査1の結果と合わせてFig. 10に示す。調査1では50%弱が不特定相手とのやりとりに興味をもっていたが、調査2では20

%強まで減少した。「Eメールで悩み事を相談したりしますか」という質問に3件法で回答を求めた結果、「よく相談する」10.2%、「時々相談する」47.8%、「Eメールでは相談しない」42.0%となった。「機会があればEメールで相談にのってもらったり、カウンセリングをしてもらいたいと思いますか」という質問には「はい」が26.6%、「いいえ」が73.4%であった。以上の結果は特定の対人関係の間で依存度や絆が強くなっている反面、第3者への相談にEメールを使うということには消極的な結果となり、調査1と比較して大きく変化した。Eメールでの相談をする場合に必要だと思うことについて集計した結果をTable 3に示す。

Eメール相談に使う媒体について、パソコンと携帯電話の両方がある場合にどちらを使うか4件法で尋ねた結果、「どちらでもかまわない」という回答が最も多く、47.0%であった。2000年度調査では5.7%と少なかった「携帯電話があればパソコンは使わないと思う」が13.5%まで増加し、「パソコンがあれば携帯電話は使わないと思う」の12.8%を上回った。

## 3. 性別分析の結果

調査1の1日の携帯電話での平均通話時間、1日の携帯メール回数については性別による差は見られなかった。しかし、調査2の携帯メールに関する項目では、1日の携帯メール受信数、1日の携帯メール送信数、平均

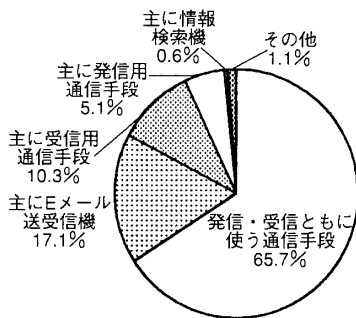


Fig. 8 携帯電話の使用状況 (2000)

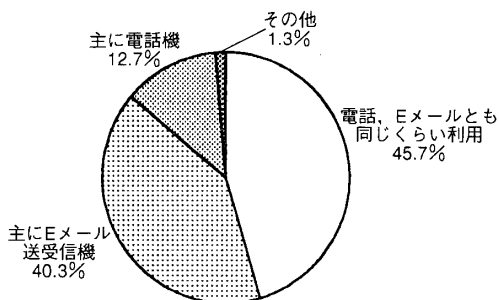


Fig. 9 携帯電話の使用状況 (2002)

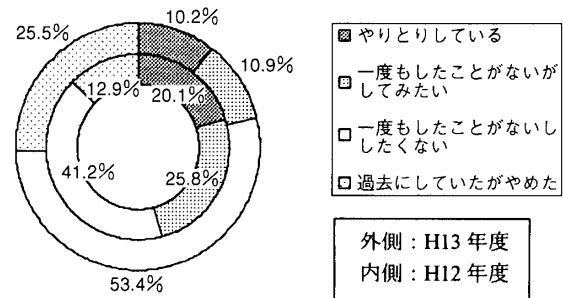


Fig. 10 不特定相手とのEメール経験

Table 3 Eメール相談に必要なこと

項目	H13年度 %	H12年度 %
1 秘密が厳守されること	83.4	86.0
2 素早く返信があること	47.0	42.0
3 個人的な気持ちや感情が伝わること	32.8	40.4
4 専門家による相談であること	29.1	31.1
5 継続してもらえなこと	26.8	26.4
6 ハンドルネームを使うこと	24.5	26.4
7 表現が丁寧であること	20.2	22.3
8 直接会わないこと	19.9	14.5
9 直接面接すること	12.9	15.0
10 口語的であること	8.6	6.7
11 継続しないこと	3.3	5.2
12 その他	2.3	1.6

入力文字数、最長メール文字数および、絵文字使用度のすべてにおいて女性の方が男性より有意に得点が高かった (Table 4)。また、携帯電話の使用について、「主に E メール送受信機」と「それ以外」の2群間で検定した結果、調査1、調査2とも女性が E メール送受信機として携帯電話を使用している傾向が示された (調査1:  $\chi^2=4.132$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ , 調査2:  $\chi^2=11.102$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$ )。

調査1の携帯電話の通話相手の1位について性差は見られなかったが、携帯メール相手の1位については有意差が見られ ( $\chi^2=19.027$ ,  $df=4$ ,  $p<.01$ )、男性は恋人・異性の友人と、女性は同性の友人とやりとりすることが多く、性別で対象が異なることが明らかになった ( $\chi^2=19.027$ ,  $df=4$ ,  $p<.01$ )。また1.3で算出した対象別の依存度得点について、「自分」についてのみ性差が見られ、男性の方が女性より他者でなく自分を頼りにしている傾向が見られた ( $t=2.072$ ,  $df=169$ ,  $p<.05$ )。

調査1、調査2に共通する E メールに関する質問では、不特定相手とのやりとりと E メールでの相談の有無に2回とも性差が見られた (Fig. 11, 12)。不特定相手とのやりとりについて男性は積極的であり、女性は消極的である傾向が示された (調査1:  $\chi^2=4.343$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ , 調査2:  $\chi^2=4.899$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ )。また、E メールコミュニケーションの中で、男性より女性の方が相談を行っている傾向が示された (調査1:  $\chi^2=12.444$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , 調査2:  $\chi^2=12.998$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ )。E メール相談への希望は2回とも性差が見られなかった。

#### IV. 考 察

2回の調査結果から、大学生にとって携帯電話は単なる情報伝達手段ではなく、最も身近なコミュニケーションメディアであることが明らかになった。特に携帯メールによる文字コミュニケーションは同世代の対人関係の絆や依存意識を高めるものとして機能していると考えられる。調査2による携帯メールの1日平均送受信数はほぼ同数であり、受信したメールに対して何らかの返信を返すというコミュニケーションが行われていることが示

唆される。文字によるコミュニケーションは非同期性で一方方向の特性を持つが、携帯メールは受信したことがすぐにわかることから双方向的コミュニケーションになりやすい。直接言いにくいことを伝えたり、相手の都合を考えずに自分のペースで連絡できる点で携帯メールは大学生に受け入れられているのだろう。現在の若者の対人緊張の強さ (三宅, 2001)、相手の反応への過敏さ (都築・木村, 2000) など先行研究と同様の特性が見出されたとと言えるだろう。

大学生は携帯電話自体を身近なツールと感じており、携帯電話によるコミュニケーションを頻繁に行っている。そのコミュニケーションの相手は心理的に親しみをもち、依存対象でもある。本研究から携帯電話の通話相手、携帯メール相手と普段の依存対象との正の相関が示された。依存対象だから携帯電話で頻繁にコミュニケーションをとり始めたのか、携帯電話による頻繁なコミュニケーションの結果、相手への依存度が高まったのかはわからないが、相互に作用していると考えるのが妥当で

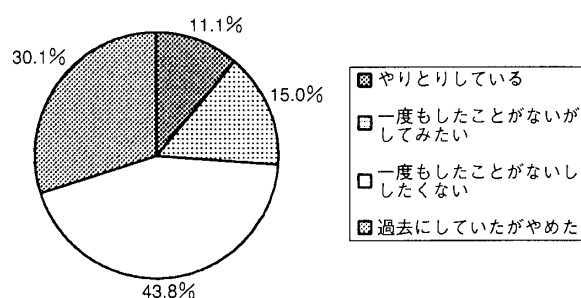


Fig. 11 不特定相手との E メール経験 (男性, 2002)

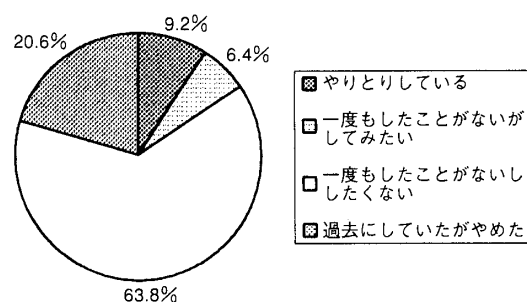


Fig. 12 不特定相手との E メール経験 (女性, 2002)

Table 4 携帯メールに関する項目の性別分析結果 (2002)

	性別	N	m	SD	t	df
1日のメール受信数	男性	158	8.5	7.7	-3.116**	257.03
	女性	139	11.8	10.1		
1日のメール送信数	男性	156	7.3	6.8	-4.200***	237.30
	女性	138	11.5	10.0		
平均入力文字数	男性	147	56.2	40.2	-2.381*	276
	女性	131	67.7	40.5		
最長メール文字数	男性	143	174.5	119.1	-2.354*	272
	女性	131	212.4	146.8		
絵文字	男性	158	2.0	2.9	-3.130**	297
	女性	141	3.0	2.4		

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$

## 携帯電話コミュニケーションから見た大学生の対人関係

あろう。携帯電話によるコミュニケーションの対象を見ると、音声通話ではほとんど出てこないきょうだいや先生が携帯メールでは挙げられている。このことは携帯メールコミュニケーションが対人関係を広げる可能性を示唆したものとも言えるだろう（岡田・松田，2002）。その反面，不特定相手とのEメールへの希望は減少してきていること，恋人との音声通話および携帯メールの頻度の高さ，そして恋人への依存度との高い正の相関などから，狭い選択的人間関係（松田，2002；三宅，2002）の中で絆を深めるのに携帯メールが使用されていることも読み取れる。

また，携帯メールは男性よりも女性に利用頻度が高いという先行研究の結果（松田，2001；見城，2001；橋元，2001）が再確認された。男性は不特定相手とのやりとりと比較的積極的であるのに対して女性は消極的であること，男性の方が女性より他者でなく自分を頼りにしていることから，男性にとって携帯電話は積極的に新しい人間関係（特に異性関係）を広げるもの，女性にとっては親しい仲間（特に同性の友人と）の絆を強めるものとして機能する可能性が考えられる。以上のように考えると，女性がEメールで相談する率が高いのも理解できるだろう。

大学生の携帯電話保有率は9割を超えており，98.02%（都築・木村，2000），96.3%（田中，2001）など1人1台の時代の到来を告げる報告もある。携帯電話というメディアが対人関係に与える影響についてさらなる研究が期待される。

## V. 要 約

近年，コミュニケーションメディアの多様化やその普及・影響について論じられているが，携帯電話の急速な変化・普及とそのことが与える影響については研究・議論が追いついていない感さえある。本稿では，2回の調査によって携帯電話コミュニケーションの実態から見えてきた大学生の対人関係について考察することを目的とする。特に携帯メール利用についての実態を報告するとともに，性別分析の結果も報告する。

調査は関西学院大学の学生に対して，質問紙調査を行った。1回目の調査（以下調査1）では携帯電話の所有率や利用実態について，2回目の調査（以下調査2）では調査1の結果に基づき，携帯メールの利用実態についてより詳細に尋ねた。

調査1は2000年6月中旬から8月末にかけて，調査員5名が大学内，または大学周辺で個別に調査を実施した。収集したデータ数は197名分であり，有効回答数は195名（男性94名，女性101名）となった。調査2は2002年1月中旬から1月末にかけて，調査員2名が学部の講義に出席していた学生を対象に集団または個別に調査を

実施した。収集したデータ数は305名分であり，有効回答数は302名（男性161名，女性141名）となった。

調査結果から，大学生にとって携帯電話は単なる情報伝達手段ではなく，最も身近なコミュニケーションメディアであることが明らかになった。特に携帯メールによる文字コミュニケーションは同世代の対人関係の絆や依存意識を高めるものとして機能していると考えられる。本研究から携帯電話の通話相手および携帯メール相手と普段の依存対象との正の相関が示された。携帯電話によるコミュニケーションの対象を見ると，音声通話ではほとんど出てこないきょうだいや先生が携帯メールでは挙げられている。このことは携帯メールコミュニケーションが対人関係を広げる可能性を示唆したものとも言えるだろう。その反面，不特定相手とのEメールへの希望は減少してきていること，恋人との音声通話および携帯メールの頻度の高さ，そして恋人への依存度との高い正の相関などから，狭い選択的人間関係の中で絆を深めるのに携帯メールが使用されていることも読み取れる。

また，携帯メールは男性よりも女性に利用頻度が高いという先行研究の結果が再確認された。男性にとって携帯電話は積極的に新しい人間関係（特に異性関係）を広げるもの，女性にとっては親しい仲間（特に同性の友人と）の絆を強めるものとして機能する可能性が考えられる。

携帯電話というメディアが対人関係に与える影響についてさらなる研究が期待される。

## 引用文献

- 足立由美・松本和雄 2001 大学生における携帯電話による Email カウンセリングについての基礎的調査 こころの健康 Vol. 16, No. 2, 76-86.
- 藤竹 暁・水越 伸・松田美佐・川浦康至 2001 座談会携帯電話と社会生活 現代のエスプリ 405 至文堂.
- 橋元良明 2001 携帯メールの利用実態と使われ方 日本語学 Vol. 20-9, 23-31.
- 今林俊一・島田俊秀 1989 青年期における独立意識に関する研究（I） 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編 41, 263-289.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 日本心理学会心理学モノグラフ No. 14 49-68. 東京大学出版会
- 加藤隆勝 1987 青年期の意識構造—その変容と多様化— 誠心書房.
- 見城武秀・森 庸子・森 康俊 2001 携帯電話・PHS 利用の高度利用 2001 携帯電話・PHS の利用実態 東京大学社会情報研究所調査研究紀要 15, 175-195.

- 三宅和子 2001 ポケベルからケータイ・メールへ  
日本語学 Vol. 20-9, 6-22.
- 三宅喜美代 2002 ケータイメールを利用する若者の  
対人関係 大垣女子短期大学研究紀要 No. 43,  
49-59.
- 岡田朋之・松田美佐 2002 ケータイ学入門 有斐閣  
選書.
- 総務省 2002 平成 13 年度通信利用動向調査報告書  
世帯編  
(<http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp>)
- 高田茂樹・足立由美・雄山真弓・松本和雄 2000 調  
査媒体としての携帯電話の可能性に関する研究  
関西学院大学情報科学研究第 15 号, 5-15.
- 田中ゆかり 2001 大学生の携帯メール・コミュニケ  
ーション 日本語学 Vol. 20-9, 32-43.
- ソフトバンク 1999 Yahoo! Internet guide 4(10)
- ソフトバンク 2000 Yahoo! Internet guide 5(8)
- TBS プリタニカ 2001 Newsweek 日本版 2001/4/25  
号 58-59.
- TBS プリタニカ 2002 Newsweek 日本版 2002/1/16  
号 54-55.
- 都築誉史・木村泰之 2000 大学生におけるメディア  
・コミュニケーションの心理的特性に関する分析  
応用社会学研究 No. 42, 15-24.